

# 義寂と憬興の『法華経』一乗解釈について

朴 媯 娟

## 1. はじめに

7世紀半ばより8世紀半ばまでの100年間は、新羅仏教学の全盛期にあたる  
と言える。新羅仏教の四大著述家として数えられる、元暁(617-686)、  
義寂(7-8世紀頃)、憬興(?-681-?)、太賢(8世紀中頃)が活動したのもこ  
の時期にあたる。<sup>1)</sup>

義寂と憬興は、同じ時期に活動しており、唯識・浄土といった関心分野  
も類似していた。<sup>2)</sup>義寂と憬興の思想については、かつて日本の浄土教研究  
者たちによって注目された。義寂の『無量寿経述義記』輯逸本の編纂が進  
められ、<sup>3)</sup>そこにあらわれる浄土思想を明らかにする研究が活発であった。<sup>4)</sup>  
憬興については、現存する『無量寿経連義述文賛』を中心として研究が進  
められてきた。<sup>5)</sup>義寂と憬興の浄土観を比較する研究もあった。<sup>6)</sup>

その外に、義寂の『大乘義林章』と『菩薩戒本疏』、憬興の『三弥勒経  
疏』などを中心として研究が行われていた。

著述リストを検討してみると、義寂と憬興の相違点は、義寂には『無量  
寿経』に対する注釈が多く、憬興には『弥勒経』に対する注釈がより多い  
こと、義寂には『法華経』に対する注釈が多く、憬興には『金光明経』に  
対する注釈が多いことが言える。

ところで、唯識思想という側面においては、両者の違いが注目されてき  
た。すなわち、唐の基(632-682)と比較した場合、義寂は基とは相対立し  
て一乗家の立場をとっており、憬興は基の見解を受容して「五性各別説」

を認める立場をとっていたとされる。義寂には一乗家の様子が見受けられることは認められるが<sup>7)</sup>、憬興が果たして基の「五性各別説」<sup>8)</sup>を認めていたかについては疑問の残るところである<sup>9)</sup>。

このような疑問から出発して、まずは、義寂と憬興が『法華経』の「一乗」をどのように理解していたかについて比較してみることにしたい。新羅出身の唯識僧侶らが唐の法相宗の僧侶に比して、一乗思想を強調したとされるが<sup>10)</sup>、一乗の強調が持つ歴史的な意味がどのようなものであるかについても併せて考えてみることにしたい。

## 2. 義寂の一乗解釈

新羅の多くの唯識僧侶らは『法華経』及び『法華経論』に対する注釈を著している<sup>11)</sup>、とくに義寂は『法華経論述記』2(3)巻、『法華経綱目』1巻、『法華経料簡』1巻、『法華経集験記』2巻を著している<sup>12)</sup>。

義寂の『法華経』一乗解釈は『法華経論述記』を通して知ることができるが<sup>13)</sup>、所々において『法華経』が一乘法を説く經典であることを明かしている。義寂は『法華経』の経題「妙法蓮華」にみられる蓮華を「十慢の濁を出離し、一乗の実相を開敷す」に喩えており<sup>14)</sup>、『法華経』と『華嚴経』を比較しながら、『法華経』は「三乗を開分するは、但だ、一乗のみに会する義を現示せんと欲するが為めに」とし、『華嚴経』は「謂わく、三乗・五乗は、本、一無相より流出し、後に還って、一無相に帰する義を顕わさんが為めに」として<sup>15)</sup>、『法華経』が一乗中道をあらわしているとした。

それでは義寂が考えていた一乗の意味とはどのようなものであろうか。義寂は一乗を『法華経論』にみられる破二明一<sup>16)</sup>を積極的に解釈する方法によって説明を行った。

A. 和上云わく、出水とは十慢の対治に喩い、花開とは十種無上を顕わ

すに喩う。此の『經』の明かす所は、唯だ此の二義のみ。前は則ち破二、後は則ち明一なり。故に蓮花を以て、妙法門に喩う。（中略）此の『經』の宗は、破二明一を以て、以て宗極と為す。<sup>17)</sup>

Aにおいて和上は義寂のことである。義寂は『法華經』の宗が破二明一であり、二乗の執着を破して、一乗を明かすことであるとした。それならば、破すべき二乗はどのようなもので、明かすべき一乗とはどのようなものであろうか。

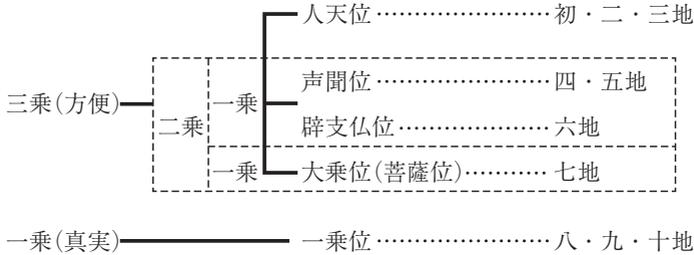
B. 二乗の諸もろの功德に同じからずとは、所謂二乗は、是れ声聞・辟支の二乗の所説に非ず。二乗は、十地に分別す。初めの三地の相は、世間に同じきが故に、是れ人天位なり。四・五の二地は、是れ四諦觀、世の声聞位なり。第六地の中、因縁觀を脩するが故に、是れ辟支位なり。第七地は、三乗の中、是れ大乘位なり。後の三地は、是れ一乗位なり。既に前の七地は三乗位なるが故に、声聞・辟支、合して一乗と為す。第七地の中、三乗の中の菩薩、一乗と為すが故に。合して二乗と為す。是くの如きの説を作す。妙に順附し、上・下の文に同じからざるなり。<sup>18)</sup>

義寂は「破二」の「二」を、声聞乘・辟支仏乘を合した一つの乘（一乗）と、三乗の菩薩が一つの乘（一乗）と、この二つを合して二乗とした。また、三乗・一乗の觀念を菩薩の修行の段階である十地と関連付けた。

義寂が定義する三乗には、人天位が含まれ、三乗と完全に区分される上位として、一乗位を設定している。人天位を初、二、三地に、声聞位を四、五地に、辟支仏位を六地に、大乘位（菩薩位）を七地に、そして一乗位を八、九、十地に配置している。

義寂と憬興の『法華経』一乗解釈について（朴）

この観念を「破二明一」に適用させれば、義寂は、声聞、辟支仏、菩薩の四地から七地を出でて、八地に入ることを強調したことになる。上記の引用文の内容を図に示すと次のとおりである。



一方、李萬は、同箇所を解釈して、義寂は、声聞と縁覚を合して一乗、菩薩位を一乗、八地から十地までをまた一乗と見なし、合して三乗と解釈したとして、これは『法華経』や華嚴宗などにおいて、三乗は方便であり、一乗のみ真実であるとする内容と相反する主張、すなわち一仏乗が別に存在するのではなく、三乗の中の一つであるという見方であるために注目されるとした。<sup>19)</sup>しかし、「後の三地は、是れ一乗位なり。既に前の七地は三乗位なるが故に」とあることから明らかなように、義寂は三乗と一乗を区分していたのである。

『法華経論述記』に、一乗がどのようなものであるかについては、直接的にはあらわれていないが、義寂の論義を追っていけば、二乗の執着を破して、明かさんとする一乗は、ほかでもない十種無上であることが分かるようになる。<sup>20)</sup>

十種無上は『法華経論』「譬喩品第三」にみられる表現である。<sup>21)</sup>現存する『法華経論述記』は欠損があり、これに関する解釈が途中で終わっているため、義寂が十種無上をどのように理解していたかについては定かでないが、『法華経論』に依拠して敷衍説明すれば、次のとおりである。

十種無上の十種は、種子、行、増長力、令解、清浄国土、説、教化衆生、成大菩提、涅槃、勝妙力で、これらが無上なるものであるということである。すなわち、義寂は、無上なる（最高の）種子、修行、増長力、領解（理解力）、清浄国土、説法、衆生教化、悟り、涅槃、勝妙力が一乗であると述べているのである。一切の衆生が『法華経』を読誦することによって、善い種子を植え、最高の修行をし、増長させる力と、理解力を養い、国土を清浄にし、衆生を教化し、悟りを成就し、涅槃を証得し、勝れた力を持つことができるということである。

また、前の八地以上を一乗であるとした解釈と関連付ければ、八地以上が、すなわち、十種無上であることが分かるようになる。義寂の『法華経』理解の最大の特徴は、「一乗」を修行などにより獲得するものであると定義しているところにある。

### 3. 憬興の一乗解釈

憬興の著述に『法華経疏』8巻（又は16巻）があったが現在は伝わっていない<sup>22)</sup>。そのため『無量寿経連義述文賛』と『三弥勒経疏』における『法華経』『法華経論』からの引用文例を通して、憬興の一乗観を把握することにした。上二書における『法華経』からの引用は、単に経名を挙げる場合を除けば<sup>23)</sup>、計7回である。決して多くない数であるが、『法華経』に対する憬興の具体的な認識を窺うことができる。また、世親の『法華経論』からの引用も頻繁である<sup>24)</sup>。

憬興が『法華経』を引用した文面は「仏」と密接な関係にあるが、『法華経』を通して、仏の徳、仏の寿命、仏の国土について述べている。

まず憬興は、悟りに基づいて自利利他を實踐し（入仏法蔵）、真理の実性を証得すること（究竟彼岸）が、まさに仏の実徳であるといい、「仏、法蔵に入り、彼岸に究竟す」の概念を明確に説明するために『法華経』を引用

している。すなわち、「入仏法蔵」は『法華経』の「善く仏慧に入り、大智に通達す」の意味であり、「究竟彼岸」は『法華経』の「彼岸に到れり」の意味であるというのである。悟りに基づいた自利利他の実践が、まさに仏の智慧を能く理解して、大智に通達することであり、到達すべき彼岸とは、すなわち、真理（諦）<sup>25)</sup>であるとした。仏の智慧を強調して、これを自利利他の実践と関連付けているのである。

また、憬興は『法華経』を通して、仏が寿命の無量なる存在であることを証明した。『弥勒上生経』において化仏が登場するのは『法華経』の多宝仏塔や『金光明経』の四仏の役割と同じで、まさに多宝仏塔と四仏を通して、仏の寿命が無量なることを証明し得るとしている<sup>26)</sup>のである。

憬興は仏の寿命が五劫でもなく、四十二劫でもなく、無量なる理由がまさに『法華経論』で言うように、国土が「報仏如来の眞実浄土」であり、その地が「他受用土」であるためなるとしたのである<sup>27)</sup>。すなわち憬興は、仏は十地に至る修行によって獲得される「他受用土」の世界にましますが、ここがまさに『法華経』の世界であり、『法華経論』で言うところの浄土の姿であるとしたのである<sup>28)</sup>。

このように、憬興の『法華経』に対する認識が「仏」と密接に関係付けられているとみることができる。憬興は、一乗・三乗に対する理解も基本的には『法華経』に依拠している。

C. 述して云わく、此れ第四、復た利他を辨ずるなり。方便多しと雖も此の中の方、即ち巧権の名なり。（中略）故に今、即ち善く方便を立つるは、即ち意方便なり。諸仏に随順して三乗を尋ねて化するが故に。三乗を顕示するは、即ち口方便なり。一乗を分別して三乗を説く、三乗亦た即ち仏の方便なるが故に。中・下の滅度は、即ち身方便なり。縁覚は中と名づけ、声聞は下と名づく。即ち法華の中の無二・三の義

に同じ。菩薩は不定二乗を引<sup>みちび</sup>いて、仏乗に趣かせんと欲するが故に、彼の涅槃にして滅度を現<sup>29)</sup>ず。

憬興は一乗を分別して三乗をいうのは口方便であり、三乗の教化のために方便を善く立てるのは意方便であり、縁覚と声聞の滅度は身方便であるとした。『法華経』において「二乗・三乗の義なし」というように、縁覚乗・声聞乗を区分せずに、菩薩はこれら（不定二乗）を導いて、仏乗、すなわち、智慧を得せしめるべきであるというのである。『法華経』において三乗の設定が結局は方便の問題に帰結されるように、『無量寿経連義述文賛』も三乗を利他の方便として説明しているだけである。

憬興は菩薩乗が導いていくべき群生を無聞非法人と求三乗の四種衆生に区分しているが、求三乗は定性三乗と不定三乗を指し、無聞非法人は無性有情を指<sup>31)</sup>すとした。ここでも憬興は三乗を一乗に導いていくべき菩薩の教化対象として共に扱うのみで区別はしていない。

それでは憬興は「一乗」をどのように定義したのであろうか。

D. 述して云わく（中略）一乗は即ち智なり。三乗有ると雖も、其の極み、無二なるが故に一乗と云う。有るが説かく、此の一乗に於いて、窮みは究竟と名づく。涅槃の果に至り、彼岸に至るが故に、非なり。若し、一乗を窮みて涅槃に至れば、当に菩薩に非ざるべきが故に。<sup>32)</sup>

憬興は一乗を究竟なり涅槃の果とみる論義を批判しながら、一乗とは、即ち智慧であるとした。憬興は、「法の、夢や電<sup>かみなり</sup>等の如しと知るは、即ち世俗諦の智なり。法性の空なることを通達するは、即ち勝義諦の智なり<sup>33)</sup>」といい、世俗における智も強調したが、一乗を言う智慧とは仏の智慧、即ち無分別智、後得智のことをいうようである。<sup>34)</sup>

唯識思想は、無分別智と後得智の獲得を究極の目標にするが、これは存在の本質を悟った一切智者の智慧である。無分別智は働きがなく、後得智は働きがあるが、その働きがまさに慈悲である。智慧なき慈悲はなく、慈悲は智慧を離れては存在し得ない。慈悲は常に智慧をよりどころとしており、ある意味において、慈悲としての働きこそが智慧の完成体であると言えるのである。<sup>35)</sup>

憬興は『法華経』を通して、菩薩は三乗を導いて一乗に趣くべきであって、その一乗こそが仏の智慧であり、その智慧とは、ほかでもない自利利他の実践であると述べているのである。

#### 4. 義寂と憬興の一乗解釈の比較

『法華経』「方便品」にみられる一乗（一仏乗）は、一切衆生に仏知見を悟らしめることであり、声聞ら二乗にも「自身が仏の眞の仏子である」という自覚を發せしめ、それによって二乗作仏の可能性を明確にしている。<sup>36)</sup>しかし、基に代表される唐の法相宗の僧侶らが、このような『法華経』の一乗の觀念とは異なる「五性各別説」を主張して、初唐の仏教界においては、一乗解釈をめぐる活発な議論が行われていた。

大乘經典における一乗には二つの側面があるようである。一つは、仏の境地、それ自体を強調する側面であり、もう一つは、衆生が仏の境地に到達できるということを強調する側面である。瑜伽行派の文献でも一乗を説いているが、『解深密経』と『顕揚聖教論』における一乗は「真理」「証果」「行道」の同一を強調しており、『大乘莊嚴経論』と『撰大乘論』は不定種姓の成仏という観点より、一乗は仏が修行者に知らしめ、修行者はそれを聴いて、成仏の意志を持つことを強調しているとされる。<sup>37)</sup>

義寂と憬興の一乗解釈の違いを比較してみると次のとおりである。

義寂は一乗を十種無上であると定義し、一乗に到達する方法として二つ

を提示している。第一は善根を積むことであり、『法華経』の説法を多聞薫習することにより、善根が積まれるとする。『法華経』の説法を聴くことによって、闍提も外道も声聞も縁覚も不信、我見、畏苦、自愛の障害をなくす変化が起り得て、究極には悟りの境地に入られるとした<sup>38)</sup>。これは『法華経』だけ聴いても、悟りを得ることができるという意味とも解釈される。

一乗に到達するための第二の方法は止観修行である。義寂は一乗・三乗に関する議論を修行の階位と関連付けて解釈することによって、三乗とは異なる一乗の状態は、八地の獲得により可能であるとみた。八地の菩薩は無上なる種子や増長力を持って国土を清浄にし、衆生を教化して、大いなる悟りを得るなどの状態になるというのである。八地の獲得方法については、具体的には言っていないが、義寂は出家の弟子らを対象に止観の努力を強調したに違いない。

憬興は『法華経』を引用して菩薩は三乗を導いて一乗に趣くべきであるとし、一乗とは、即ち仏の智慧（無分別智、後得智）であるとした。また、無量なる寿命を持つ仏がまします浄土がまさに他受用土であるということ、『法華経』を通して知り得るとした。要するに憬興は、『法華経』を浄土果の境地が描写されている經典として理解していたようである。浄仏国土の菩薩行の実践により具現すべき世界が『法華経』に描写される世界であるというのである。

総じて言えば、義寂が一乗を通して衆生が仏の境地に到達し得ることを強調したというなら、憬興は仏の境地それ自体を強調したと言えるのである。このような違いが持つ思想的な意味については、今後さらに詰めていくことにしたい。

#### 注

本稿は、拙著『新羅 法華思想史 研究』（慧眼、2013）での指摘を踏まえて、義寂と憬興の『法華経』一乗解釈の比較という観点より再構成したものである。

義寂と憬興の『法華經』一乗解釈について（朴）

- 1) 春日（1973, 36-37）によると、それぞれの著述部数は元暁210部、太賢116部、憬興77部、義寂61部であるという。
- 2) 義寂の著述リストは、崔（2003, 47-48）、憬興の著述リストは、朴（2013, 118）参照。

	義寂	憬興
唯識	成唯識論未詳訣 百法論惣述 百法論註 馬鳴生論疏 大乘義林章	解深密經疏 瑜伽(釈)論記 顯揚論疏 成唯識論貶量 顯唯識論記 俱舍論鈔 瑜伽論鈔 成唯識論記 因明論義鈔 瑜伽論疏 (大乘)法苑(義林章)記
浄土	無量寿經述義記 [一部現存] 無量寿經疏 觀無量寿經綱要 稱讚浄土經疏 弥勒上生經料簡	弥勒成仏經述贊 弥勒成仏經疏 弥勒經述贊 [一部現存] 弥勒經逐義述文 三弥勒經贊 弥勒上生經疏 三弥勒經疏 [現存] 無量寿經連義述文贊 [現存] 阿弥陀經略記 無量寿經疏
般若經 涅槃經 法華經 金光明經	大般若經綱要 大般若經幽贊 般若理趣分經幽贊 般若理趣分述贊 法華經料簡 法華經綱目 法華經集驗記 [一部現存] 法華經論述記 [一部現存] 涅槃經綱目 涅槃經義記 涅槃經疏	大般若經綱要 金剛般若(經)料簡 大涅槃經述贊 大涅槃經料簡 大涅槃經疏 法華經疏 金鼓經疏 最勝王經略贊 金光明經述贊 金光明經略意 最勝王經疏 [輯逸有]
戒律	菩薩成本疏 [現存] 梵網經疏 梵網經文記 本業環珞經疏	四分律羯磨記 四分律捨毘尼要
その他		大集經疏 灌頂經疏 十二門陀羅尼經疏 法鏡論 藥師經疏 大乘起信論問答

- 3) 春日（1940）、恵谷（1958）参照。
- 4) 望月（1946）、春日（1973）、恵谷（1976）、梯（1989）参照。
- 5) 渡辺（1978）参照。
- 6) 松林（1966）、松林（1968）参照。韓国における代表的な研究としては安啓賢の論文がある。安（1963）、安（1964a）、安（1964b）参照。
- 7) 最澄（767-822）は『守護國界章』などにおいて義寂を基とは異なる一乗家として宣揚している。崔鉉植は、三乗の差別を否定した『法華經』を方便説であるとする基とは異なり、義寂は『法華經』を眞実説であるとしており、彼の思想が一乗の教えと相通ずるものがあるとした。ただし、五性各別に対する義寂の言及がみられないことから、絶対的な一乗論師であったかまでは明確でないとした。崔（2003, 52-59）参照。
- 8) 基は定性二乗の不成仏と無性有情の認定という二つの脈絡のうち、とくに無性有情の存在を強調したという。吉村（2001, 153-154）参照。
- 9) これについては、別稿を準備中であるため、詳細な議論は省略する。
- 10) 竹村（1982, 269）参照。

義寂と憬興の『法華経』一乗解釈について（朴）

- 11) 東國大學校佛教文化研究所（1976）などを参照。

著者	書名
元暁	法華経宗要 1巻 [現存、仁和寺]
	法華経方便品料簡 1巻
	法華経料略 1巻
	法華略述 1巻
憬興	法華経疏 16(8)巻
順憬	法華経料簡 1巻
玄一	法華経疏 8(10)巻
義寂	法華経論述記 3巻 [上巻の一部現存、京大図・聖語蔵]
	法華経綱目 1巻
	法華経料簡 1巻
	法華経集験記 2巻 [下巻の一部現存、東大図]
道倫（遁倫）	法華経疏 3巻
太賢	法華経古迹記 4巻
円弘	法華経論子注 3巻 [上巻・下巻の一部現存、聖語蔵・金沢文庫]

- 12) 李萬は、義寂が『法華経』に関心が大きかった理由が『法華経』が一乗思想を宣揚しているためであるとした。李（2004, 13-14）参照。
- 13) 『法華経論述記』は「解云」がある前半部と「解云」がない後半部に分かれるが、前半部は義寂の講義を書きとめたものであり、後半部は義寂と弟子の義一などが質疑を取り交わす形式で進行された講義を義一が整理したものとみられる。日本の章疏では『法華経論述記』の撰者について、義寂積義一撰とするが、前半部は義寂積、後半部は義一撰にあたとみることができる。前半部の全部と後半にみられる「和上」や「問答」は義寂の見解とみることができるため、これらを中心として義寂の一乗観について整理することにした。朴（2008b, 192-201）参照。最近、金炳坤は後半部にみられる和上が義寂の説であることを根拠に、後半部では義寂の解釈を一部採用にとどめたものとし、後半部の全体を直ちに義寂の理解であると判ずるにはあたらぬとした。金炳坤（2014, 509）参照。
- 14) 『法華経論述記』（義寂積義一撰）X46, 779c13-14: 言蓮華者。喩顯妙法。出離十慢之濁。開敷一乗之實。故譬蓮華。
- 15) 『法華経論述記』（義寂積義一撰）X46, 789b18-c3: 問何故。此經說時中。眉間白豪中。放大光明。花嚴經說時中。面門者放光明。其義云何。答白豪。於舒一丈五尺。倦唯三寸。爲欲現示開分三乘。會但一乘之義。亦爲顯示一乘中道。是故眉間白豪。放大光明。唯照東方者。爲顯妙法最勝。闍浮提四方中。東方爲本。日始出故。隨順世間。唯照東方。花嚴經中。從面門放光之意。門者出入。謂爲顯三乘五乘。本從一無相流出。後還歸於一無相之義。是以從面門。放十方遍照。爲顯法界法門。普周之義。

義寂と憬興の『法華經』一乗解釈について（朴）

- 16) 『妙法蓮華經爰波提舍』（菩提留支訳）卷下 T26, 10b22-24: 第一序品示現七種功德成就。第二方便品有五分示現破二明一。餘品如向處分易解
- 17) 『法華經論述記』（義寂釈義一撰）X46, 789a4-9: 和上云。出水者。喩對治十慢。花開者。喩顯十種無上。此經所明。唯此二義。前則破二。後則明一。故以蓮花。喩於妙法門。何以得知。第十六妙法蓮花。明破二明一義耶。答夫自經名。表宗極矣。此經宗者。以破二明一。以爲宗極。
- 18) 『法華經論述記』（義寂釈義一撰）X46, 787b16-23: 不同二乗諸功德者。所謂二乗者。非是聲聞辟支二乗所說。二乗者。分別十地。初三地相。同世間故。是人天位。四五二地。是四諦觀。世聲聞位。第六地中。脩因緣觀。故是辟支位。第七地者。三乘中。是大乘位。後三地是一乘位。既前七地三乘位。故聲聞辟支。合爲一乘。第七地中。三乘中菩薩。爲一乘故。合爲二乘。作如是說。妙順附於不同上下文也。
- 19) 李（2004, 15-16）参照。
- 20) 朴（2011, 185-187）参照。
- 21) 『妙法蓮華經爰波提舍』（菩提留支訳）卷下 T26, 9a21-c21参照。
- 22) 日本の章疏に引かれる『法華經疏』の逸文を紹介する論文がある。金炳坤（2013, 508-503）参照。
- 23) 仏弟子を紹介するなり、ほかの大乗經典（『涅槃經』『維摩經』『般若經』など）と単純比較した場合である。
- 24) 金亮淳（2009, 48）によると、『無量壽經連義述文贊』における『法華經論』からの引用は4回であり、このうち2回は『妙法蓮華經玄贊』からの孫引きであるという。しかしながら、筆者の調査によると、『無量壽經連義述文贊』8回、『輯逸金光明最勝王經憬興疏』7回、『三弥勒經疏』1回と、計16回以上である。朴（2010, 523-524）参照。
- 25) 『無量壽經連義述文贊』（憬興撰）卷上 T37, 134c16-27: 經曰入佛法藏究竟彼岸者。述云第二廣歎有二。此初歎實德也。有說入佛法藏者申因上昇。究竟彼岸者彰果畢竟。如來藏中恒沙之法名佛法藏。證會名入。到涅槃岸名究竟故。此恐不然。如來藏即佛性義。而言證會恒沙德法名因上昇者即違經云見佛性時得無上覺故。若證佛性非菩提果至涅槃岸應非圓寂果故。今即入者達解究竟證解。知如實自利及事利他故云入佛法藏。即法華中善入佛慧通達大智也。彼岸者眞理。證此實性故云究竟。即彼經中到於彼岸也。恒照二諦以自利他可謂實德故。
- 26) 『三弥勒經疏』（憬興撰）T38, 311c28-312a5: 經曰爾時世尊以下。第二應佛說法。問化佛何故談說甚深陀羅尼門。答彌勒菩薩爲得深陀羅尼門故問應佛說陀羅尼既足。何故須重化佛說。答應化所說不虛爲證故。法華經猶恐他疑故。多寶佛塔踴爲證而說。又金光明經恐他不信。故四佛現令信命。此亦爾也。
- 27) 『無量壽經連義述文贊』（憬興撰）卷中 T37, 150b1-11: 經曰阿難白佛至清淨之行者述云此第三逐難重解也。佛壽若短不應五劫清淨行故。顯彼佛壽四十二劫以釋此疑。有說彼壽多劫。劫盡之時衆生雖見劫盡所燒其土安穩故。法積菩薩五劫修行清淨之因。

義寂と憬興の『法華經』一乗解釈について（朴）

即同法華云衆生見所燒我土安穩天人常滿。此恐不然。法華所說論自釋云報佛如來眞實淨土。即知彼土是他受用。他受用佛壽必無量不可言四十二劫故。今即四十二劫者蓋歲數劫。故經五劫攝淨土行非劫盡也。大通佛壽不可數劫尙非淨土。

- 28) 朴 (2010, 539-540) 参照。
- 29) 『無量壽經連義述文贊』（憬興撰）卷中 T37, 144b20-c6: 經曰善立方便至而現滅度者。述云此第四復辨利他也。方便雖多此中方便即巧權之名。（中略）故今即善立方便即意方便。隨順諸佛尋三乘法故。顯示三乘即口方便。分別一乘而說三乘。三乘亦即佛方便故。中下滅度即身方便。緣覺名中聲聞名下。即同法華中無二三之義。菩薩欲引不定二乘。令趣佛乘故。於彼涅槃而現滅度。
- 30) 『勝鬘師子吼一乘大方便方広經』（求那跋陀羅譯）一卷 T12, 218b9-c5において衆生を無聞非法衆生、求聲聞者、求緣覺者、求大乘者と区分している。
- 31) 『無量壽經連義述文贊』（憬興撰）卷中 T37, 145c7-15: 群生者即勝鬘中四種衆生。所謂無聞非法及求三乘者。有說於四群中初非法人無感聖善故云不請非也。後三乘種未必皆有感佛善故。初無聞人亦應有感聖世善故。華嚴瑜伽皆有此四。而後三種通定不定。初之一種無性有情。故人天善根應成就。菩薩荷此四群生爲自重擔而成就故云荷負。作不請友皆該四群也。
- 32) 『無量壽經連義述文贊』（憬興撰）卷下 T37, 162b4-11: 經曰究竟一乘至于彼岸者。述云此第四成德奇勝有二。初成自德後成化德。初又有二。此初集善勝有三對。此初智斷對也。一乘者即智。雖有三乘。其極無二。故云一乘。有說於此一乘窮名究竟。至涅槃果故至于彼岸。非也。若窮一乘至涅槃者。應非菩薩故。今即信解斯極故云究竟彼岸者即斷。既得斷智障無爲故云至彼岸。
- 33) 『無量壽經連義述文贊』（憬興撰）卷下 T37, 160b10-12: 經曰通達諸法性至必成如是利者。述云此第四舉智願記成土也。智法如夢電等即世俗諦智。通達法性空即勝義諦智。
- 34) 憬興の後得智、無分別智に対する理解は次の文面より知ることができる。  
『無量壽經連義述文贊』（憬興撰）卷中 T37, 148c13-16: 經曰深諦善念至窮其涯底者。述云此後歎證理勝也。諦者審察。法海者一眞法界。即後得智深思諦觀稱眞法界故云善念。無分別智窮達深眞盡其奧實故云究涯底。
- 35) Lee (2009, 137) 参照。
- 36) 平川 (1982, 18-19) 参照。
- 37) 吉村 (2000) 参照。
- 38) 第七文殊師利答成就においてみられるもので、文章が長いので、内容を簡単に表にまとめると次のとおりである。

聞提	欲論大法	破不信障 入十信位	建大法幢	破無明習氣 方便生死 入大淨位
外道	兩大法雨	破我見障 入十解位	燃大法燈	破我見習氣 因緣生死 入大我位
聲聞	擊大法鼓	破畏苦障 入十解位	吹大法螺	破畏苦習氣 有有生死 入大樂位
獨覺		破自愛障 入十廻位	說大法	破自愛習氣 無有生死 入大常位

義寂と憬興の『法華經』一乗解釈について(朴)

〈参考文献〉

- 安啓賢 1963 「憬興의 彌陀淨土往生思想」『佛教學報』1: 139-196.  
—— 1964a 「新羅僧 憬興의 彌勒淨土往生思想」『震檀學報』25·26·27: 33-65.  
—— 1964b 「義寂의 彌陀淨土往生思想」『東國史學』7: 1-58.  
恵谷隆戒 1958 「義寂の無量壽經述義記について」『佛敎大學研究紀要』35: 1-58.  
—— 1976 『淨土敎の新研究』山喜房佛書林.  
梯信暁 1989 「新羅義寂『無量壽經述義記』の一考察——世親『淨土論』の位置付けについて」『印仏研』38(1): 207-210.  
春日礼智編 1940 『無量壽經述義記』眞宗學研究所.  
—— 1973 「新羅義寂とその『無量壽經述義記』」金知見・蔡印幻編『新羅佛敎研究』山喜房佛書林, 31-46.  
金相鉉 2000 「輯逸金光明最勝王經憬興疏」『新羅文化』17·18: 213-254.  
金炳坤 2013 「憬興撰『法華經疏』の逸文について」『印仏研』62(1): 508-503.  
—— 2014 「義寂積義一撰『法華經論述記』について」『印仏研』63(1): 510-505.  
金亮淳 2009 『憬興의『無量壽經連義述文贊』研究』博士論文(韓國學中央研究院).  
竹村牧男 1982 「地論宗・撰論宗・法相宗」平川彰・梶山雄一・高崎直道編集『講座・大乘仏敎8 唯識思想』春秋社 263-301.  
平川彰 1982 「大乘仏敎の成立と法華經の關係」塚本啓祥編『法華經研究9 法華經の文化と基盤』平樂寺書店, 3-37.  
崔鉉植 2003 「義寂의 思想傾向과 海東法相宗에서의 위상」『불교학연구』6: 33-70.  
東國大學校佛敎文化研究所編纂 1976 『韓國佛敎撰述文獻總錄』東國大學校出版部.  
朴妯娟 2008a 「新羅 義寂의『法華經』 이해——『法華經論述記』 분석을 중심으로」『불교학연구』21: 177-218.  
—— 2008b 「『法華經論述記』의 構成과 話者」『梨花史學研究』37: 183-208.  
—— 2010 「新羅 憬興의 法華經觀과 淨土觀」『희당학보』15: 520-556.  
——・佐藤厚訳 2011 「新羅義寂の『法華經論述記』の一考察」『東アジア仏敎研究』9: 175-194.  
—— 2013 『新羅 法華思想史 研究』慧眼.  
松林弘之 1966 「朝鮮淨土敎に於ける憬興・義寂の一考察」『佛敎學研究』22: 30-34.  
—— 1968 「朝鮮淨土敎の研究——彌陀と彌勒の淨土觀を中心に」『佛敎文化研究所紀要』7: 109-112.  
望月信享 1946 「新羅義寂の著書並びに無量壽疏」『淨土學』21: 10-55.  
吉村誠 2000 「唯識學派における「一乗」の觀念について」『印仏研』48(2): 622-626.  
—— 2001 「唯識學派における「一乗」の解釈について——円測と基の議論を中心に」『印仏研』50(1): 152-155.  
Lee, Hye-kyung 2009 『唯識사상에서 意識의 구조와 전환에 관한 연구——世親의『攝大乘論釋』을 중심으로』博士論文(梨花女子大學校).

義寂と憬興の『法華経』一乗解釈について（朴）

李萬 2004 「新羅 義寂의 一乗思想과 修行論」『佛教學報』41：1-18.

渡辺顕正 1978 『新羅・憬興師述文贊の研究』永田文昌堂.

〈キーワード〉義寂、憬興、『妙法蓮華経憂波提舍』、『法華経論述記』、『無量寿経連義述文贊』、『三弥勒経疏』、一乗、法華

日本語訳：金 炳坤（身延山大学准教授）

本稿は2011年の政府（教育科学技術部）の財源に基づく、韓国研究財団の支援を受けて行われた研究である。（NRF-2011-361-A00008）

